

【翻刻紹介】

## 茨木市補陀洛山常称寺蔵『総持寺縁起絵巻』

“Soujiji-Engi-Emaki” of the Jyōshōji: A Transcription and Exposition

日 沖 敦 子

Atsuko HIOKI

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 4

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 4号  
2006年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN  
JANUARY 2006

## 【翻刻紹介】

# 茨木市補陀洛山常称寺蔵『総持寺縁起絵巻』

日 沖 敦 子

要旨 今日、西国三十三カ所観音順礼二十二番札所としても知られる総持寺（茨木市）に伝わる縁起絵巻は『今昔物語集』以後、多くの説話、物語に所収される藤原山蔭説話を伝える一縁起として名高い。尾崎久弥氏による全文翻刻紹介により、茨木市総持寺蔵『総持寺縁起絵巻』の存在が広く知られるようになって以降、梁瀬一雄氏によって、全体的な藤原山蔭説話の整理が試みられ、その後、星田公一氏によって、さらに、説話、縁起史料の発掘と整理が試みられた。池上洵一、金谷信之氏によっても検討が重ねられ、これらの諸先学により、藤原山蔭説話の体系的把握が可能となった。また、本絵巻を含め、藤原山蔭の一連の説話文学研究は、お伽草子『秋月物語』や『鉢かづき』を検討するうえでも極めて重要な課題である。これらの諸先学に続く研究として、各縁起の基礎的研究がまず第一の課題として挙げられよう。近年の注目すべき研究として、平安鎌倉期の総持寺と世俗権力の様相について言及した岡野浩二氏の御論が挙げられる。各時代の社会構造が文学に与える影響を考える上で

も本史料は貴重なものとなる。本稿では、「総持寺縁起」研究の端緒として、未だ広く紹介されることのなかった茨木市常称寺に所蔵される『総持寺縁起絵巻』の紹介を試みる。

キーワード… 絵巻、縁起、総持寺、常称寺、藤原山蔭

大阪府茨木市にある高野山真言宗の一寺院、補陀洛山総持寺は、藤原高房、山蔭、その子孫一族により建立されたとされる草創縁起を有する一寺院として知られる。『朝野群載』巻一（延喜一二年（九一二）四月八日「総持寺鐘銘」）には、「粵若祖父越前守藤原朝臣、帰心於普門妙智、傾首於無礙大慈、而墜露溘然、閃電倏尔、納言尊考、軫先業之不遂、歎善因之未成、多以黄金、附入唐使大神御井、買得白檀香木、造千手觀世音菩薩像一軀、仍建衢場於摂津国島下郡、安置此像、号曰総持寺、於是第二男備前権介公利鑄豐鐘一口、于時延喜十二年夏四月八日、為銘曰、已上略記」とあり、山蔭の子公利により、総持寺創建に際し、鑄造された鐘に残された銘文が記されている。縁起と共通する内容が既に確認できるものであり、興味深い。このように、魚名流藤原氏一族と総持寺創建に纏わる縁起の形成には、高房、山蔭、その子孫（説話、縁起は七男七女と記すが、『尊卑分脈』では七男一女が確認できるのみ）三代に亘る建立由来が記される。藤原山蔭に関する説話伝承は様々であるが、『今昔物語集』（巻一九—二九）『宝物

集』(七)『十訓抄』(巻一―五)『長谷寺験記』(下二三)『直談因縁集』(巻八―一八)『平家物語』(巻六)『源平盛衰記』(巻二六)ほか、多くの文献に散見する亀の報恩、継子譚として流布したものが最も著名であろう。

本稿で紹介する茨木市補陀洛山常称寺藏『総持寺縁起絵巻』は、かつて尾崎久弥氏により翻刻された『三つの絵巻』に所収される、総持寺藏『総持寺縁起絵巻』と大筋に於いては、類似した内容を伝えるが、異なる点も多く、文体が漢文体である点、經典の文言や故事を多分に含んでいる点も異なっている。また、縁起成立を考える上でも重要であると考えられる、北向雲竹の手になる添書が常称寺に現存する。常称寺は、山蔭四世孫民部卿正雅の子孫吉田通雅(西玄)によって建立された、浄土真宗本願寺派の一寺院である。通雅が蓮如に帰依したことが寺記に記されており、寺宝として「蓮如上人六字名号」ほか「蓮如上人絵像」等も保管されている。『総持寺縁起絵巻』は、説話の型で述べれば、『長谷寺験記』『三国伝記』(巻七―二七)『榻嶋晩筆』(巻九―一六)『直談因縁集』などと同型(高房・山蔭型)に分類できるものであり、とりわけ、縁起内容とこれらの説話との関係も注意して検討する必要があるだろう。また、藤原高房、山蔭一族の寺院創建の由来譚は、山蔭と関連する他寺院の縁起形成、地方の説話伝承の形成とも関係性が見出せるようである。これらの点については、縁起形成の問題と併せて、別稿に記すこととしたい。

## 【藤原山蔭関連 主要先行研究】

- (一) 尾崎久弥「総持寺縁起絵巻」『三つの絵巻』観音瞻仰会、一九三五
- (二) 梁瀬一雄「山蔭中納言物語考」『説話文学研究』三弥井書店、一九七四
- (三) 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」『同志社国文学』一九七四「山蔭中納言説話の成立」『長谷寺験記』の場合」『同志社国文学』一九七六「山蔭中納言のこと」(I) (V)『同志社大学国文学会大学院部会研究会報』一九七〇(七七)
- (四) 池上洵一「説話の虚構と虚構の説話―藤原高藤説話をめぐって―」『日本文学』三五、一九八六「藤原山蔭説話の構造と伝流」『講座平安文学論究』四、風間書房、一九八七
- (五) 黒嶋敏「伊達氏由緒と藤原山蔭―中世人の歴史認識―」『日本歴史』五九四、一九九七
- (六) 金谷信之「総持寺縁起と鉢かつき物語の史的背景」『関西外国語大学』六七、一九九八
- (七) 保立道久「秘面の女と『鉢かつき』のテーマ」『物語の中世―神話・説話・民話の歴史学』東京大学出版会、一九九八
- (八) 浅野日出男「総持寺縁起絵巻」解説(徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二)
- (九) 岡野浩二「撰津国総持寺と藤原山蔭・撰関家・浄土寺」『仏教

の文化史』吉川弘文館、二〇〇三)

(十) 日沖敦子「受け継がれる山蔭像 流布本系『鉢かづき』を中心に」『人間文化研究』二、二〇〇四)

### 【書誌】

【所蔵】大阪府茨木市補陀洛山常称寺蔵 【巻数】一卷 【成立】近世前期(延宝頃力) 写 【外題】無 【内題】無 【表装】朱地金繡紋入 【軸紙】巻頭軸付紙三九、二糧／巻末軸付紙 七六・〇糧  
【料紙】斐紙一六紙(詞書八紙、挿絵八紙) 【寸法】縦、三六・〇糧 横、一五四六・二糧 【印】無 【備考】桐箱の表蓋裏に墨書で「縁起／中城／常称寺山蔭家什物」とある。同寺には、縁起絵巻制作を考える上で興味深い添付文書(北向雲竹筆)も保管されている。

### 【凡例】

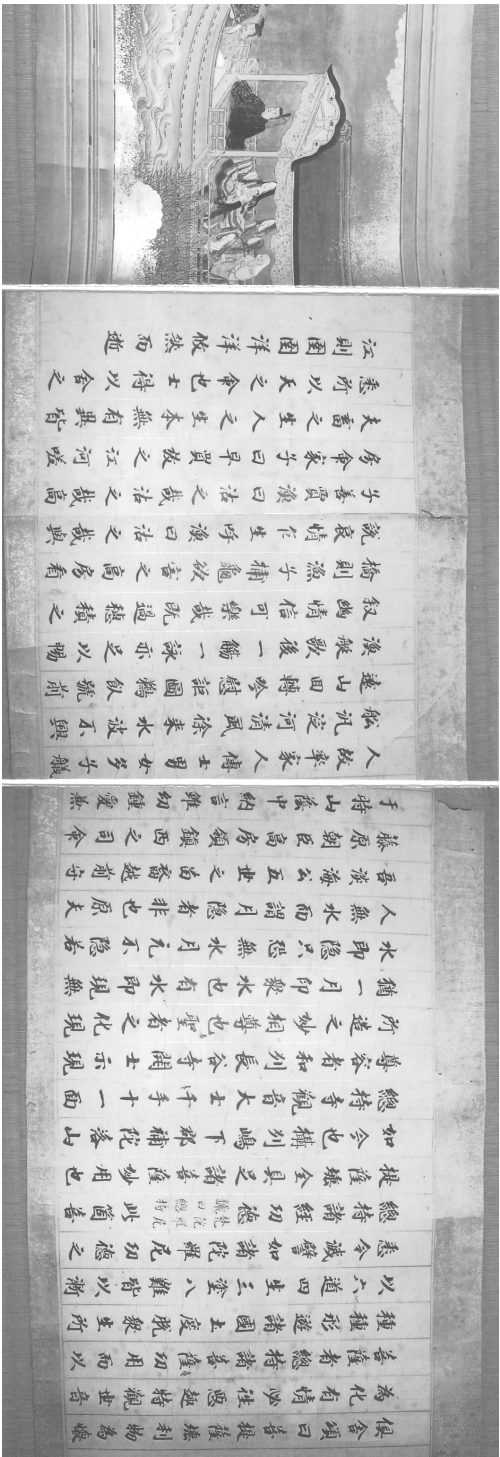
- 一、茨木市補陀洛山常称寺蔵『総持寺縁起絵巻』を底本とし、底本になるべく忠実に翻刻した。但し、異体字は通行字体になおした。
- 二、読解の便宜を図り、句読点、鉤括弧を私付した。
- 三、行変は原本通り。必要に応じて、末尾に注を付した。
- 四、挿絵位置については、該当箇所【一】で記し、詞書と併せて影印を付した。

五、なお、「総持寺縁起絵巻」の名称は、茨木市総持寺蔵絵巻の外題に「惣持寺縁起」とあり、常称寺蔵絵巻には外題が確認できない

ことなどを考えると、その名称に問題が残るが、諸先学によっても一般的呼称として「総持寺縁起絵巻」と定着していることから、本稿でもその名称を用いることとする。なお、注においては、両絵巻を常称寺本総持寺本と略称する。

六、注に引用されている書名の巻号について、冒頭で記した書名の巻号と同じ場合はその巻号記載を省略している。

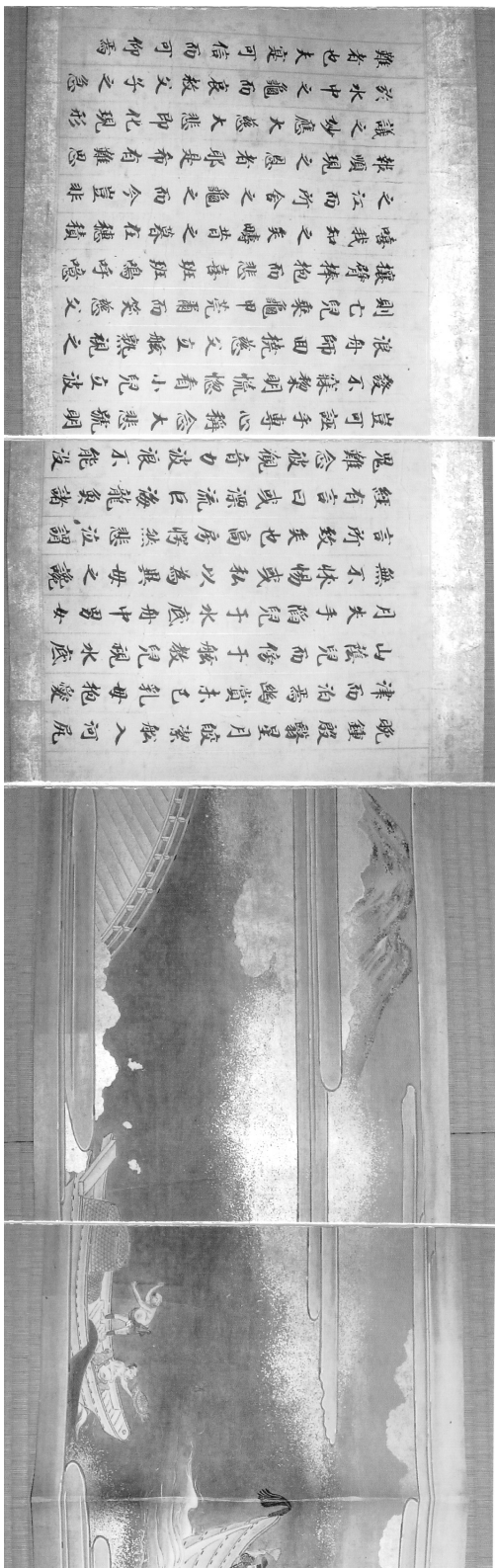




【翻刻】

俱舍(1)頌曰、『菩提薩埵、利物為懷、  
為化有情、必往惡趣(2)』。特觀世音  
菩薩者總持(3)諸菩薩功用、而以  
種種形遊諸國土、度脫衆生。所  
以六道(4)四生(5)三塗(6)八難(7)、皆以漸  
悉令滅。譬如諸陀羅尼。功德之  
總持諸經功德<sup>總持陀羅尼</sup>總持此箇善  
提薩埵全具足諸菩薩妙用也  
如今也。撰州嶋下郡補陀洛山  
總持寺觀音大士千手十一面  
尊容者、和州長谷寺開士示現  
所造之妙相尊也(8)。聖者之化現  
猶一月印衆水也。有水即現、無  
水即隱。只恐無水月元不隱。若  
人無水、而謂月隱者非也。原夫  
吾波海公五世之苗裔、越前守  
藤原朝臣高房(9)、鎮鎮西之司命。  
于時、山陰中納言(10)雖幼、鍾愛(11)兼  
人。故、率家人伝主男女多子、饑  
飢汎泛河清風徐來水波不興  
遠山回轉參越詎圖鸞似號前  
漁艇歌後一觴一詠亦足以暢  
叙幽情信可樂哉既過穗積之  
橋則漁子捕龜欲富之高房看  
就哀情乍生呼渡曰沽之哉與  
子善寶渡曰沽之哉沽之哉高  
房命家子曰、『早買故之江河嗟  
夫畜之生、人之生、本無有異。皆  
悉所以天之命也。』(17)士得以舍之  
江。則團團洋洋慨然而逝

【第一図】



晚鍾殷鑒(21)、星月皎潔(22)、船入河尻  
津(23)而泊焉。幽實未已乳母(24)抱愛  
山蔭兒、而傍于教兒視水底  
月。失手墮兒于水底。舟中男女  
無不怵惕(25)。或私以為異母之讎  
言所致矣也。高厚愕然悲泣謂  
「經有言曰、『或漂流巨海。龍魚諸  
鬼難。念彼觀音力。波浪不能沒。』」(26)  
豈可誣乎。」(27)專心稱念大悲號。明  
免(28)、不寐。黎明恍惚。看小兒立波  
浪。舟師回撓、慈父立較熟視之。  
則亡兒乘龜甲、莞爾(29)而笑。慈父  
據臂、捧抱而悲喜班班。「嗚呼、噫  
嘻、我知之矣。曠昔(30)之責、在穗積  
之江、而所舍之龜之而、今豈非  
報順現之恩者耶。是希有難思  
議之妙心、大慈大悲即化現形  
於水中之龜、而哀救父子之急  
難者也。夫寔可信而可仰焉。

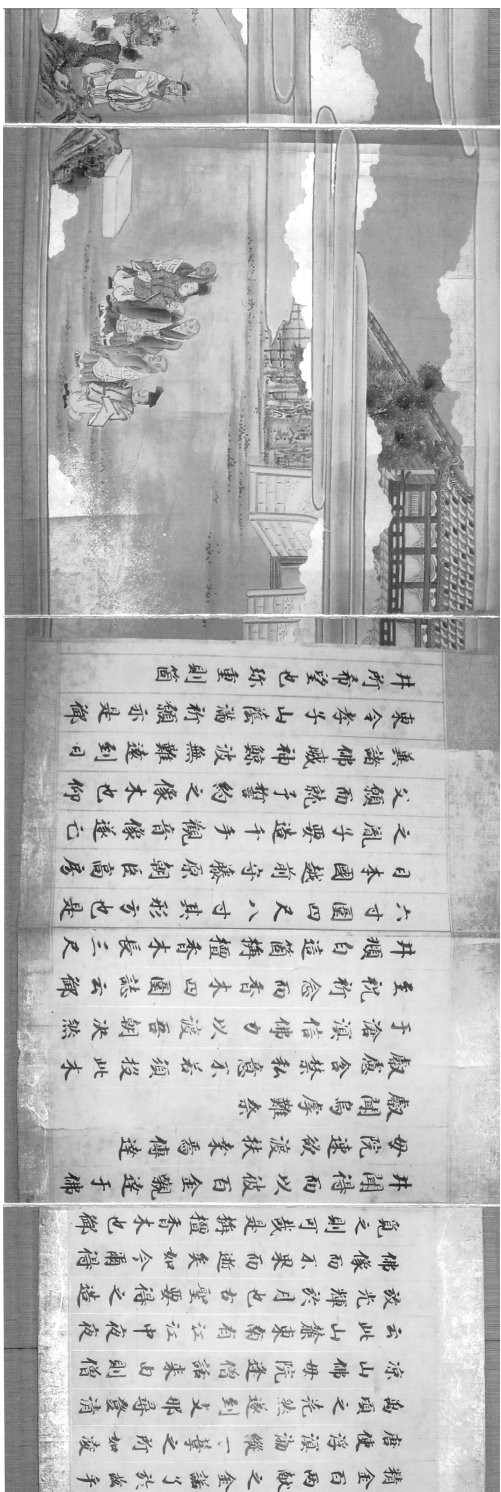


【第二図】

因思仏恩広博（31）、難容易報、惟宜  
 為童子之現当世世、而尋覓清  
 淨靈木、刻鏤大悲像、而没齒投  
 誠（32）。終日竟夜、安想聖容、受持聖  
 号、礼拜聖像、以修冥福也。四方  
 馳求、未獲像木而、奄（33）爾薨。孝子  
 山蔭、憶慈父之夙志（34）、日滝矣。時  
 也、有遣唐使、名大神御井（35）。因而  
 山蔭子往語之曰、「尺聞、支那清  
 涼山有栴檀香木、則底乎公到  
 彼求斯靈木、遂父子志願乃遣

精金百兩獻之。金諾（36）了。於茲乎  
唐使浮濱渤，縱一筆之所如後  
萬頃（37）之、茫然遂到支那。尋登清  
涼山仏母院（38）、逢僧。話來由。則僧  
云、「此山麓東南有江。江中夜夜  
放光，輝於月也。古聖（39）要得之造  
仏像而、不果而逝矣。如今爾得  
覓之、則可哉。是栴檀香木也。」御  
井開得而、以彼百金囑達（40）于仏  
母院。速欲渡扶桑（41）焉。伝達  
叡聞。鳥虞、難察  
叡慮含禁私意。不若須投此木  
于滄溟。信仏力以渡吾朝。決然  
至祝祈念、而香木四圍誌云、「御  
井願白、這箇栴檀香木、長三尺  
六寸、圓四尺八寸、其形方也是  
日本國越前守藤原朝臣高房  
之胤子（43）、要造千手觀音像遂亡  
父願而就于誓約之像木也仰  
美諸佛威神踪波無難達到  
東令孝子山陰滿祈願亦是御  
井所希望也。珍重則箇」

【第三図】



茨木市補陀洛山常称寺藏『線持寺緣起繪卷』



柳之山蔭子者居于洛東吉田  
私學字某日新泊而秀秀而實  
義譽芳聲鳴鳴 朝廷元慶五

年七月十二日

詔任播磨守同六年三月二日入

領播磨以徳眼氏為政學古未

春月而驛吏來告迎表明石浦

有一楹不知奚自而來漂止海

濱夜有光曜見者無不怪云尔

太守乃將驛吏往其所而視之

則有三行九十四之文字排棧

熟視乃是所謂御井之金語祝

祈而所誌之詞也感戴不堪言

焉未歷旬日御井泉樓船泊于

此太守山陰歛杆慰問御井折

然晤語相與謂曰今其時哉好

勢靈本而登征于京師擇粹刻

佛者故殿大悲尊容也卿舟造

銅乃我駕赴京相揖別去肅

敬趨裝而挂像木命士年數半

使之斷車肉而更互擔荷漸入

構之鳴下郡御擔暫息又放庸

肩不肯歇諸子戮力猶不更搖

衆僉拱手而立中納言合掌胡

跪至心禮木祈求念言堂堂手

靈木待待來于此而今却不上

想夫緣在哉緣而致手哉然則

光奉京師收命佛工並歲妙相

而回茲安置寶坊亘奉供養云

了便將擔荷則輕如始

抑又山蔭子者、居于洛東吉田

私第(45)、學業日新苗、而秀秀而実

美譽芳声鳴鳴。 朝廷元慶五

年七月十二日

詔任播磨守、同六年三月二日入

領播州(46)、以德眼民、為政學古。未

暮月、而驛吏來告。近來明石浦、

有一楹(47)。不知奚。自而來漂止海

浜。夜有光曜。見者無不怪云。尔

太守、乃將驛吏往其所、而視之。

則有三行九十四之文字。松拭

熟視。乃是所謂御井之金語祝

祈、而所誌之詞也。感戴不堪言

焉。未歷旬日(48)、御井垂樓船(49)、泊于

此。太守山陰歛杆慰問。御井折

然悟語。相与謂曰、今其時哉。好

携靈不而、蚤征于京師、採粹刻

仏者莊嚴大悲尊容也。卿舟造

銅兮、我駕赴京。相揖(50)別去。肅

敬趨裝而權像木、命士空教子、

使之斷車肉、而更互擔荷。漸入

撰之嶋下郡御擔暫息。又欲庸

肩、不肯動。諸子戮力、猶不更搖。

衆僉拱手(51)而立。中納言合掌胡

跪(52)、至心(53)礼木、祈求念言堂堂乎。

「靈木得得來于此、而今却不上

想。夫緣在於茲而然乎哉。」然則

光。「奉京師伏命。仏工莊嚴妙相

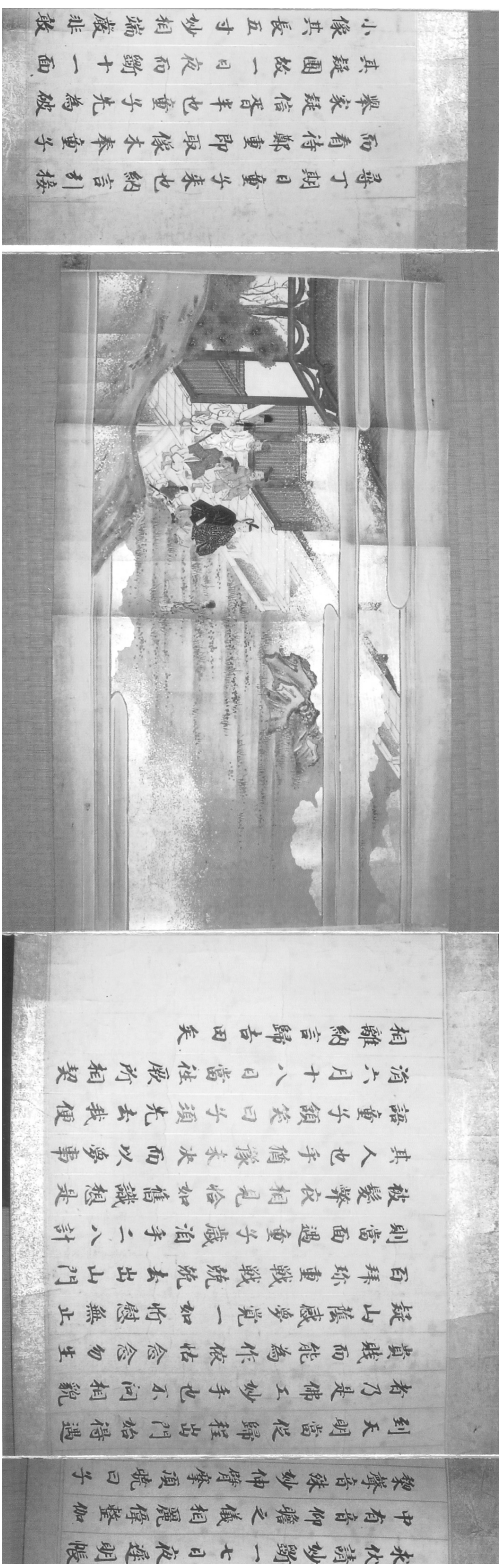
而、回茲、安置宝坊。亘奉供養。」云

了。便將擔荷、則輕如始。



【第四図】

直到洛陽東吉田私第、而上下  
踊躍歡喜無量。中納言竊意思、  
翹秀靈木靈命凡工、庶幾奉聖  
工。寐思之、寤念之。無時、而不思  
念鵲噪鴉鳴無了時、或來言、「和  
之長谷寺觀音大士流季無比  
淨聖、具一切功德、感応無辺（54）、而  
今吾子能作假怙、念念勿疑（即  
不見之是日也。誓二月初午日  
則納言信受、誘誨（55）。亦太殷懃（56）、而  
行裝懷懷慕。詣長谷寺一心專

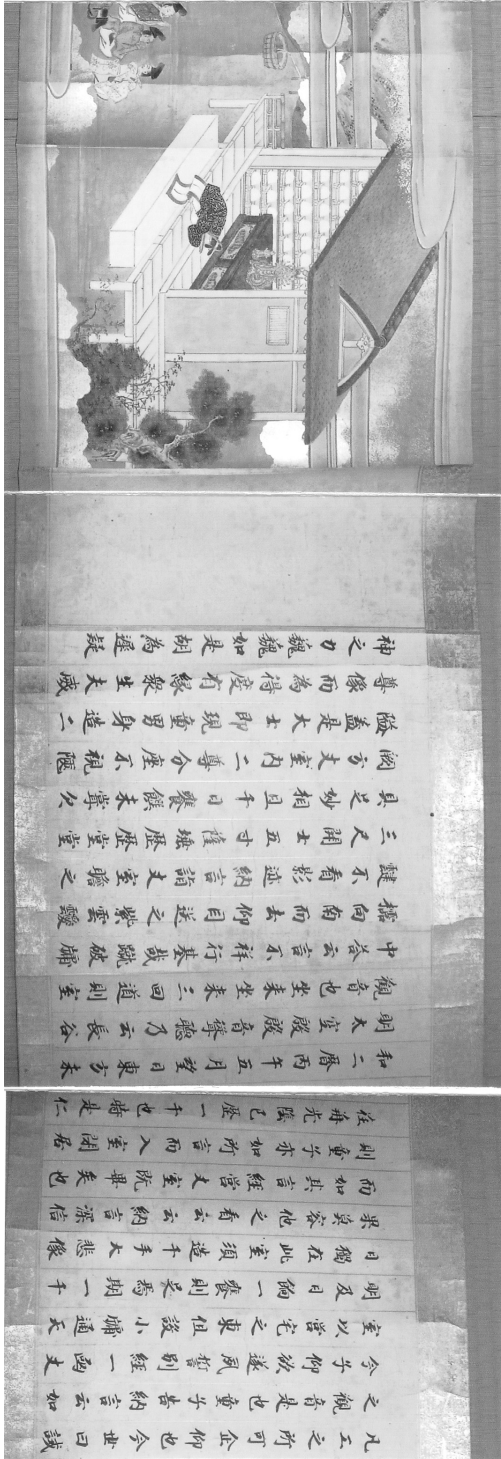


求、伏請妙斷。一七日夜運明、帳中有音。仰瞻之、儀相麗偉、整伽梨、声音殊妙、伸臂摩頂。晝日、子到天明、当促帰程、出門始得遇者。乃是仏工妙手也。不問相貌貴賤而、能為作依怙念、勿生疑。一山蔭感夢覺。一如忻慰無止。百拜殊重、戰戰兢兢、去出門。則当面遇童子。歲泊乎二八計、被髮弊衣（57）。相見恰如旧識。想是其人也乎。猶預未決、而以夢事語。童子領笑曰、「子須先去。我便消六月十八日、当往厥所。」相契相離。約言歸吉田矣。

【第五回】

尋丁期日童子來也。納言引接而看待鄭重。即取像木、奉童子。孝家疑信皆半也。童子先為破其疑团、故一日夜而斷十一面小像。其長五寸。妙相端嚴、非敢





【第六圖】

凡工之所可企仰也(58)。今世曰、「誠之觀音是也。」童子告納言云、「如今子仰欲遂夙誓、別經一兩丈室以當宅之東。但設小幡通天。明及日餉一饗、則足焉。期一千日、獨在此室。須造千手大悲像果。莫容他之看云云。」納言深信而、如其言經營丈室。既畢矣也。則童子亦如所言而、入室閉居。桂菴(60)光陰已歷一千也。時是、仁和二曆丙午五月望日(61)、東方未明太空殷殷音聾。乃云、「長谷觀音也。坐來坐來。」三回道。則室中答云、「言不祥行基哉。」(62)蹴破牖據向南、而去。仰目送之。紫雲纔離(63)不看影迹。納言詣丈室瞻之。三尺開士五寸薩埵歷歷堂堂。具足妙相。且千日擺鏡未嘗。欠闕方丈室內二尊分座、不視陋隘。蓋是大士即現童男身。造二尊像、而為得度有緣衆生。夫威神之力量巍如是。胡為遲疑。





更想要好道二尊於攝津之境  
而草創精舍發須安置然則為  
支靈臺以為宣間授焉妙相眼  
履跡尚之乎乃命工不日成之  
如今洛東吉田新長谷寺之本  
尊是也嗚呼光陰修忽不待人  
仁和四年二月中約言山  
陰歲六十五而率矣遺體七男

七女豈是皆孝情忠信盡誠慎  
終以受其寵懷於嶋下之境就  
于落成之寶坊而朝於夕咀芬  
華修冥福稍私念擬須達長者  
布金之營也志操富哉寬平二  
拾二月四日正當慈父之三回  
忌前七日至諱日齊戒沐浴誠  
情倍於他日乃方斯時為昭明  
東高樓瞻明星淡淡紫雲靄靄

鬢髻碧落有奇智這是諸佛經  
地祇國精舍之古與補陀洛山  
之今異域同緣之阿蘭若也云  
爾都鄙傳實以達  
陛下  
一條帝院恭動  
歟感屈吉田裔孫正雅而掌伽  
藍營造之宏規乃補別當職而  
特奉祈  
貴祈長久無監大法會為國家安  
謐永勿有缺違也

更想要好道二尊於攝津之境、

而草創精舍 亟須安置。然則函

丈靈台以為空間、模写妙相、脈

厥跡尚足乎。乃命工不日成之。

如今、洛東吉田新長谷寺之本

尊是也 (64)。嗚呼、光陰修忽不待人。

仁和四年二月初四日、中納言山

陰歲六十五而率矣。遺體、七男

七女 (65) 老、是皆孝悌忠信尺誠慎。

終以葬其寵懷於嶋下之境 就

于落成之宝坊、而朝於夕咀芬

華 (66) 修冥福。猶私念擬須達長者 (67)

布金之營也。志操富哉。寬平二

拾二月四日 (68)、正當慈父之三回

忌、前七日至諱日、齊戒沐浴、誠

情倍於他日。乃方斯時為 昭明

嵩高、樓檐明星、螢螢紫雲、靄靄

髣髴、碧落有音響。這是諸佛經

行遊戲之天、菩薩應化利生之

地。祇園精舍之古号、補陀落山

之今、異域同緣之阿蘭若 (69) 也。云

爾、都鄙伝実以達。

陛下

一條帝院 (70) 恭動。

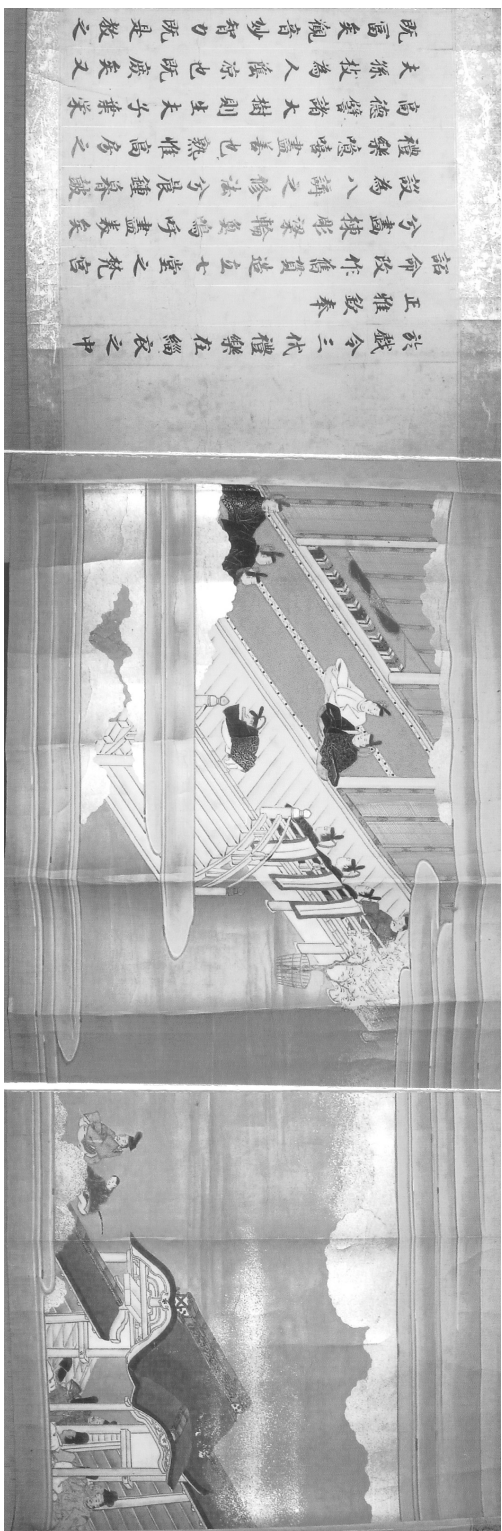
歟感屈吉田裔孫正雅 (71)。而掌伽

藍營造之宏規 (72)。乃補別當職、而

特奉祈。

貴祈長久、兼監 (73) 大法會、為國家安

謐、永勿有缺違也。



【第七図】

於戲令、三代礼楽（74）在繡衣之中。

正雅欽奉。

詔命改作旧貫、造立七堂之梵宮

兮。面棟彫梁輪角。嗚呼、尽美矣。

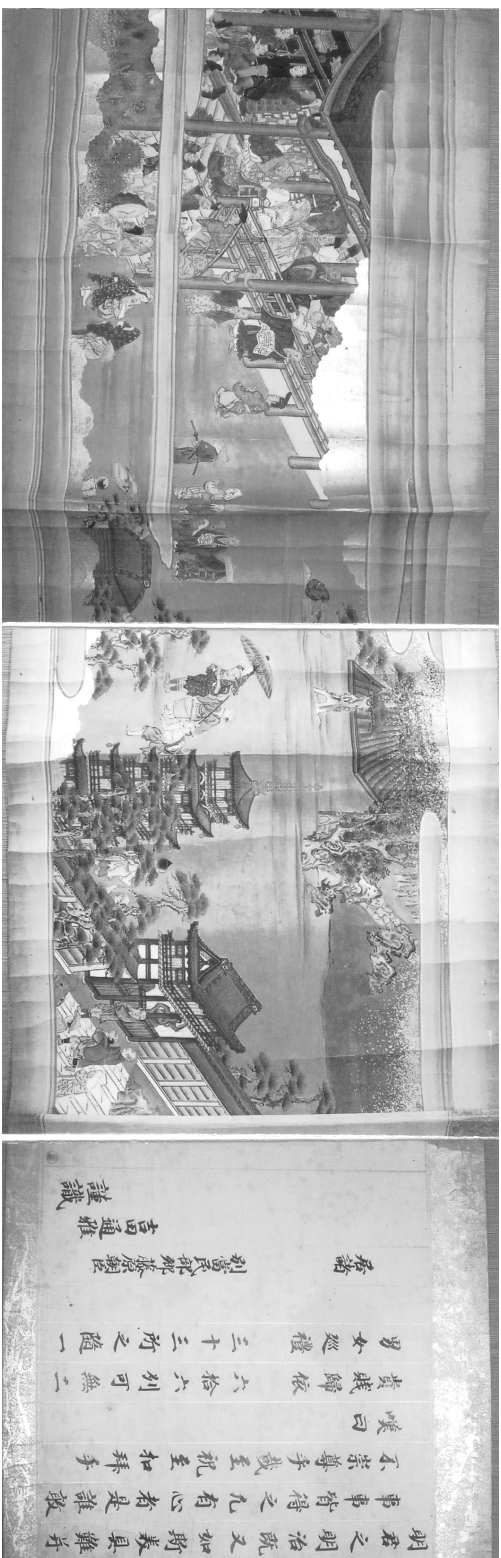
設為人講（75）之修法兮。晨鍾暮鼓（76）

礼楽噫嚅盡善也。熟惟高房之

高德、譬諸大樹、則生夫子葉、榮

夫孫枝、為人蔭涼也。既庶矣、又

既富矣。觀音妙智力、既是教之。



【第八図】

明君之明治既又如斯。美具雖并  
 事事皆得之。凡有心者是誰。敢  
 不崇尊乎哉。至祝至扣拜乎。

嘆曰、

貴賤相依  
 男女巡礼

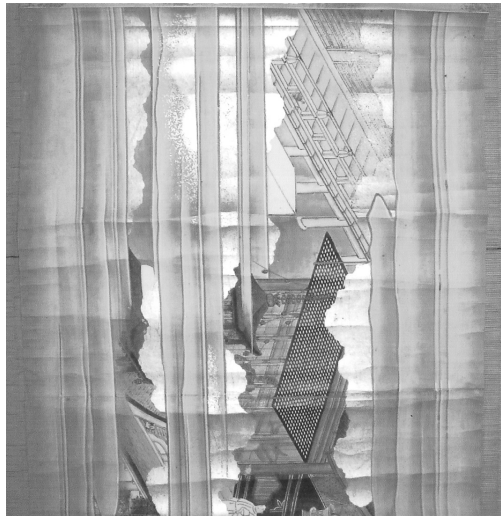
居諸（78）

六拾六州可無二

三十三所之隨一（77）

別当民部卿藤原朝臣

吉田通雅（79）  
 謹識



注

(1) 仏書。世親著。玄奘訳。三十卷。説一切有部の教理の集大成である「大毘婆沙論」の綱要書。一切諸法を五位七十五法に分け、迷いと悟りについて詳細に論ずる。仏教の基礎的教学書。阿毘達磨俱舍論。俱舍。なお、六百行の頌を為す。常称寺本の冒頭に記された文言は「俱舍論」の六百行の頌の内には確認できない。但し、『阿毘達磨俱舍論』第三(三〇卷／尊者世親造・唐玄奘譯／『大正新修大藏經』九(毘曇部四)』には、「転言開種姓 一成仏三餘 麟角仏無転 一座成覺故」の頌に続いて、「論曰、(…略…) 菩薩利物利物為懷。為化有情必往惡趣。」と確認され、縁起に記された文言は、頌ではなく、この論を指すものと考えられる。『俱舍論頌疏論本』第三(唐圓暉、『大正新修大藏經』四一(論疏部二)』には、同頌に続いて、「菩薩利物。必往惡趣。」の文言が確認できるが、縁起の文言とは一致しない。

(2) 惡趣は、この世で悪いことをした者が赴く世界。また、その世界で生存した状態。

(3) 陀羅尼。よく総てのものをおさめ持つて忘れ去らないもの。

(4) 衆生がそれぞれの業によつて赴き住む六つの所。天上、人間、修羅、地獄、餓鬼、畜生道。

(5) 生物をその生まれ方から四種に分けたもの。胎生、卵生、湿生、化生。

(6) 八難のうち、地獄、畜生、餓鬼を指す。これらは報障深重にして聖に会うことができず、衆苦に逼悩せられて梵行を修することもできない。

(7) 梵行を修し、菩提の道に向うことができない難所に八種あることをいう。地獄、畜生、餓鬼、長寿天、辺地、聾盲瘡癰、世智辯聰、仏前仏後である。

(8) 縁起に於いて後述されるように、総持寺の千手観音像は、山蔭の靈夢による長谷観音の導きあつて出会つた童子によつて制作されたという内容を指す。

(9) 藤原不比等、房前、魚名、鸞取、藤嗣の子孫(藤原北家魚名流)。「尊卑分脈」には「藤越前守／中宮亮／正四下／母大納言紀古佐美女」とあり、『日本文徳天皇実録』(仁寿二年(八五二)二月壬戌(二十五日)冬)には、五十八歳で薨去したことが記されている。山蔭説話における亀の報恩の出来事を、『長谷寺験記』は「陽成天皇御宇」と記しており、『三國伝記』『直談因縁集』『橘鴨咄筆』等にも同様の記載が確認されるが、陽成天皇の在位は、八七六／八八四年であり、高房の生年とは合わない。『醍醐天皇御記』(延喜四年(九〇四)二月十日冬)に「貞観故

事有御剣、以山蔭朝臣為使「云々」、吾又始為太子初日、帝「字多」賜朕御剣、名号垂切」とあるように、貞觀故事によれば、貞觀年間に立太子した貞明親王（後の陽成帝）に守護の御剣を捧げる儀礼的役割を担っていたことが知られる。説話に於ける時代的離隔は、このような山蔭と陽成帝との関わりの中でも検討する必要がある（菅野扶美「山蔭中納言ノート」『梁塵研究と資料』一、一九八三参照）。また、『東西歴覽記』は、総持寺と新長谷寺に御音像を安置したのを「陽成院ノ時ノ事也」として記している。

- (10) 高房子。『尊卑分脈』には「從三ノ民部卿中納言ノ母同生丘母ノ仁和四二四薨六十五」とあり、『日本紀略』にも、仁和四年（八八八）二月四日、六十五歳で薨去したことが記されている。各説話に記される山蔭の没年月日に異同は確認できない。

- (11) 大事にしてかわいがること。深く愛すること。

- (12) 船支度をする。

- (13) 滋賀、京都、奈良、三重、兵庫、大阪の一府四県に跨る大河山。京都市南部を東西に流れ、大阪府で大阪湾に流入する川。一般的には、桂川、宇治川、木津川の下流部から大阪湾に注ぐまでを淀川と呼ぶ。本流中流部は宇治川、上流部は琵琶湖から流れ出る瀬田川である。

- (14) のべあらわす、ゆるゆる話す。

- (15) 深い心情、深い情愛。

- (16) 淀川（京都市伏見区）周辺にあつた橋を指すか。『直談因縁集』は「宇治橋」。

- (17) 総持寺本では「我年来觀音奉仕の身たり。然あるに今日、十八日也。其龜、我にゆるして放し」とあり、觀音の縁日と掛けている。藤原山蔭については、『総持寺縁起絵巻』をはじめとする龜の報恩説話のほかにも、様々な史料に、殺生の戒めを説く側面が見出せる。例えば、『撰集抄』巻六一四「西山上人事」には、難波の渡にいた釣人が自らの殺生を悔い、行住（後に西山上人）と名づけられ出家し、仏道修行に励んだという説話がある。行住は「我は山影の中納言とかや、申侍ける人のすゑに侍けり。父にてありし人は、東山の辺にすみて侍けるが、世中しわびて、此島に落留て、浦人の腹に我をうませて侍ける。」と説話の中で名乗っており、「山影の中納言」の末裔であるという。この説話の成立にも、藤原山蔭と殺生戒めの教えの結びつきが影響を与えていると見てよいだろう。また、『菅家文草』（十二 願文下「為藤相公、亡室周忌、法会願文」元慶八年二月十二日）には、山蔭の亡室（筑前介有孝女カ）の周忌法会の際の願文が残されており、その中で「或結網垂釣、殺昔弟兄。或走犬飛鷹、傷前君父。如是等罪、無量無辺」と殺生を懺悔する条が確認されることは興味深い。

- (18) つかれ劣るさま。又苦んで耐びない様。

- (19) ゆるやかに尾を動かす様。

- (20) ゆつたりとした様。

- (21) 平板でなく深みのあること。

- (22) 白い光を放つて明るく照り輝いているさま。

- (23) 摂津国河辺郡（兵庫県尼崎市）神崎川河口付近を指す。淀川を下る船の多くが、途中から分流する神崎川に入り河口へ至った。例えば、『高倉院嚴島御幸記』には、治承四年（一一八〇）に高倉上皇が嚴島神社へ参詣した際も一行が京都から淀川を下り、江口を経て神崎川の河口で一泊したことが記されている。なお、同記には、河尻の五条大納言邦綱御所についても記している。邦綱については、『平家物語』に「この邦綱の先祖に、山蔭中納言といふ人をはしき」という一文が確認でき興味深く、勿論、この内容は史実ではない。『平家物語』に於いて、邦綱の先

祖が山陰であると記された背景には、その内容に記される邦綱の装束に纏わる話が、中世には既に広く流布していたであろう山陰の子如無の烏帽子換えの話(『十訓抄』巻一二三五)と結びついたことと関係するのではないかと推測する。事実、平家物語諸本に共通して邦綱の話と如無の話は併記されている『源平闘静録』は除く。邦綱と山陰一族の結びつきは、その両者の物語内容の共通性によるところが強いと思われるが、「河尻」という土地を介した繋がりも背景として存在した可能性も考えられる。なお、『今昔物語集』では「鍾ガ御崎」とあり、本縁起と異なっている。後出する地名についても、説話の型(山陰・如無)、『実母・如無(型)』が異なる場合は、若干の異なりも生じている。

(24) 子を水中に落とした人物については、継母と記すものと乳母と記すものと説話によって異なる。『今昔物語集』『平家物語』等では「継母」とされるが、『長谷寺験記』『十訓抄』等では「乳母」とされる。「乳母継母」または「乳母」が落としたとする文献では、継母の策略、命令が背景にあつたことが記されている場合が多く、継子物としての要素が一層濃厚なものとなっている。

(25) おそれ驚き、心が動揺すること。

(26) 『妙法蓮華経』普門品(卷七)。

(27) 総持寺本には、「我偏に観音を信し奉る身なり。爰に最愛の子を、無道にして失る心中、争哀慙を垂給さらん。仰願は南無帰命頂礼観世音菩薩、定業亦能転の誓願深重に御座は、仮決定応受の業なりとも、我子を今一度、今生にて見せしめ給へ。此願成就せば、千手観音像を造立して、本尊に崇奉む」とあり、常称寺本よりもその内容に具体性がある。『長谷寺験記』には「決定応受ノ業ナリ共、大聖ノ御方便ニヨリテ、再ヒ我子ヲミセ給ハ、速ニ千手観音ノ像ヲ造奉ラシ」とあり、『三國伝記』等にもほぼ同文が確認できる。

(28) 夜明け、夜どおし。

(29) にっこりはほえむさま。

(30) さきの日。前日。

(31) ひろい。特に学問の見識などの広いこと。

(32) 一生涯、誠心をもって帰極すること。

(33) 久しくして。

(34) 早くから抱いている志。

(35) 『日本三大実録』(貞観一六年(八七四)六月十七日条)に、「遣伊予権掾正六位上大神宿祢己井豊後介正六位下多治真人安江等於唐家、市香菓」とありその名が確認できる。『入唐求法巡礼行記』(大中元年(八四七)閏三月十日条)及び『入唐求法巡礼行記』(大中元年(八四七)六月九日条)にも、「本国神御井」「神一郎」の記載が確認でき、大神御井が唐にしばしばは渡つた人物であつたことが窺える。なお、総持寺本では「宋朝より大神の御井といふ相人來朝せり」とあり、「御井」となっている。総持寺本の初めには「仁明天皇の御宇、承和の頃」としてのされてゐるから、「宋朝」(九六〇〜一二七九)ではなく、「唐朝」とあるべきである。総持寺本の記す「御井」も恐らく、「御井」の誤記であろう。また、『伽藍開基記』(元禄三年自跋(五年刊))は「御井」ではなく「匱」と記している。『直談因縁集』は「大河ノ三井」と記す。

(36) 堅い承諾、確かな約束。

(37) 地面または水面の広いさま。

(38) 五台山。中国山西省東北部、五台县にある仏教の名山。文殊の靈地として名高い。普賢菩薩の

靈地である峨眉山、観音菩薩の靈地である普陀山と共に、中国仏教の三大靈山とされる。唐代は五台山仏教の最盛期で中国仏教の一大中心地となり、日本留学僧の円仁らが訪れている。

- (39) 人物未詳。五台山に纏わる類似伝承あるか。
- (40) 施す。施し与える。
- (41) 扶養。日本を指す。
- (42) 「承平五年総持寺寶財帳」（「勝尾寺文書」）には「一 仏像／木像／二尺六寸白檀卅手観音像一 体本願／已上安置南仏御堂／人々願仏菩薩／目余略之」とあることから、実際の千手観音像は「二尺六寸」であったことがわかる。『兵範記』（嘉応二年（一一七〇）四月六日条）は、信範が箕面寺の帰りに総持寺へ立ち寄った際の記録として「帰路之次礼総持寺、是山蔭中納言建立本堂、安置白檀三尺余観音像」とあり、「三尺余」と記される。このほか『寺門高僧記』（四行尊伝）、『拾芥抄』（下・三十三所観音）も同様に記すが、実際の寸法は「二尺六寸」であろう。なお、このほか、『三国伝記』には「栴檀香ノ木ノ長ク三尺六寸」とある。
- (43) あとつぎ、子孫。ここでは、藤原山蔭をさす。
- (44) 大波。
- (45) 自分の住まい。私宅。京都神楽岡吉田神社内にある齋場所大元宮の西に、中納言藤原山蔭の邸地があつたと伝えられる。山蔭は総持寺に観音像を安置し、もう一体をこの吉田の地に安置して、新長谷寺とした。しかし、明治の廃仏毀釈の際、真如堂に移転され、現在真如堂内にある新長谷寺が、縁起に記されている新長谷寺であるとされる。
- (46) 『三国伝記』ほか諸説話も同日を記す。『公卿補任』元慶五年（八八一）条には、参議山蔭の尻付に「七月十六日兼播磨守権守」とあるのが確認でき、『本朝月令』（「奉河合神幣帛事」）には、「元慶八年四月。天皇御柴展殿。式部省奏諸国総振郡司擬文。式部卿本康親王。太政大臣。左大臣。及諸公卿侍。参議正四位下行左大弁兼播磨守藤原朝臣山蔭奉勅詔奏。」とあるが、播磨国に赴任したことは確認できない。
- (47) いかだ。
- (48) 十日。十日の間。
- (49) 屋形船。
- (50) 互いに会釈し、
- (51) 両手の指を胸の前で組み合わせて敬礼すること。中国の敬礼の一つ。
- (52) インド西域地方（胡）で行われた礼法で膝に地をつけて礼拝するもの。
- (53) 仏を信じる深く痛切な心、そのさま。
- (54) 限りなく、信心が神仏に通じること。またそのさま。
- (55) 「誘導」同。
- (56) 礼儀正しく振舞いあつこと。
- (57) 「門前二十四五計ノ童子有。鬢髮殊ニ乱、布衣肩ヲ綴ル。其殊ニ賤シ」（『長谷寺験記』）。『三国伝記』及び、総持寺本もほぼ同文。
- (58) 総持寺本では「…是を拜するに、凡夫の所作に非ず。奇異の靈像也。人皆信敬をなし、世こそりて竭仰いたす…」とある。
- (59) 窓。格子をはめたれんじ窓。壁にあけた明かり窓。
- (60) 歳月が長びくさま。
- (61) 八八六年。『三国伝記』も同日の明け方（仁和二年五月十五日ノ晩）と記す。

(62) 雲が盛んなさま。また暗いさま。

(63) 「よく話す行基だなぁ」の意。「サカナキ行基カナ」「長谷寺験記」、『是ハ行基菩薩歟、サカナキ二声高ニタマフ』(『直談因縁集』)、「物いひさかなき行基かな」(総持寺本)。行基(六六八

一七四九)は、奈良時代の高僧。関西を中心に貧民救済、治水活動に力を注いだことにより、初めは罪せられたが、後に厚遇され、朝廷より大僧正の位を贈られた。本縁起をはじめとする

右の諸文献にも記されている言葉であるが、何故「行基」であるかを考える必要がある。本縁起との関係に於いて興味深いのは行基四十九院の一院である、大阪府枚方市樟葉の久修園院

にも、藤原山蔭との関係が窺える縁起(『久修園院縁起』)が保管されている点である。なお、久修園院には、霊亀社という祠が現存するが、この霊亀社は昭和に入ってからのものである。

久修園院のある樟葉は、京都・大阪を結ぶ交通の要衝であり、『行基年譜』に拠れば、行基はこ

こから淀川の対岸に向けて「神亀二年」に橋(山崎橋)を架けたという。このような行基の慈

善事業の一環として、この一院建立も発願されたと考えられる。『続古事談』(第四一五)は、

丹後国石造寺に移された東師仏の起源を記しており、総持寺の草創縁起を元にしたかと推測さ

れる由来譚である。その説話には「クチニクキ文殊カナ」とあり、これは「サカナキ行基カ

ナ」を元にしたものであろう。

(64) この新長谷寺は、元京都神楽岡の吉田社、現在は真如堂内にある新長谷寺を指す(前掲注・

(45))。『東西歴覧記』に拠れば、山蔭はまず播磨国に亀井寺を建立し、その後摂津国に総持寺

と新長谷寺を建立したとある。その際、「化人」により、長谷観音を模して造った観音一体を総

持寺に、もう一体を「家領吉田に移シ、新長谷寺ト称」したとある。また、同記には「今而

所兼帯セリ、ト部ノ家ニ、八神殿ヲ近比建立、節分ノ夜、毎年疫神ノ礼ヲ出ス、新長谷寺ハ、

一篠院ノ母后、東三篠ノ女院、此ノ寺再興アリ…」とも記されている。亀井寺の建立と山蔭の

繋がりに関する記録は、このほか『峯相記』に「又白国山ノ麓ニ亀井寺トテ有…」と確認でき

るのを知るのみである。亀井寺があつたとされる白国山は『風土記』には「新良訓山」とある

が、そのような山名は現在確認できない。但し、『峯相記』に拠れば、元徳元年(一二三九)に

増位寺(随願寺)を白国山に移建したとあるから、白国山は現在の随願寺がある兵庫県姫路市

増位山あたりの山を指すものと推測される。亀井寺は既に廃寺となっており確認できないが、

(65) 山蔭の子は『尊卑分脈』では七男一女(有頼、公利、遂良、言行、兼三、中正、如無と女子一

人)が確認できるのみ。『尊卑分脈』に記された一女かは不明であるが、『大和物語』(一四三

段)には、「むかし、在中将のみむすこ在次君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭の中納

言の御庭にて、五条の御となむいひける」とあり、山蔭の子女が兼平の子滋春(在次君)の妻

であつたと記されている。山蔭と兼平の関係は、『義経記』(卷二)「遮那王殿元服の事」にも、

「日ごろは兼平、山蔭中将などの眺めける名所々々多けれど」という用例にも確認でき興味

深い。

(66) つとめ励む様子。

(67) インド舍衛国の長者。釈迦に仕え、祇園精舎を建立した。

(68) 八九〇年。

(69) 比丘の仏道修行に適した閑静な場所。寺院、草庵。

(70) 在位、九八六―一〇一。藤原山蔭の孫時姫(中正子)は、藤原兼家の妻であり、その娘であ

る東三条院詮子は一条天皇の母となった。室町期には既に絶えていた山蔭流藤原氏が、中世以



降、室町以降も様々な文学に影響を与えたこととなった主要な背景として、山蔭子孫が摂関家

の母系系譜に於いて重要な位置を占めていたことが検討されている。なお、総持寺は一条天皇

の御願寺とされ、『摂陽群談』(巻一三)には「一条・後一条・白河・鳥羽の四院に至り、勅願

所と成て賜庄园」とあり、同様の記載は『摂津名所図会』(巻五)にも確認できる。

(71) 山陰會孫、中正孫。安親子。総持寺別当を務める(『尊卑分脈』)。吉田姓を名乗ったことについ

ては、寺記に「摂州嶋下縣中城邑常称寺者。開基吉田民部(俗名也)西玄(法名也)トシ人ナ

リ。(中略)月卿ノ紫荊ヲ頒テ。総持寺ノ別当ヲ正雅ニ勅許シ。又吉田ノ姓ヲ賜フ。」とある。

なお、『華陀洛伝記』(「総持寺」)には、「山陰の中納言と申て吉田の先祖也」とある。山蔭と吉

田社については、菅野扶美氏の論考(「山蔭中納言ノト」『梁塵研究と資料』一、一九八三)

に詳しい。『大鏡』(道長上・一五七)に「この吉田の明神は山蔭の中納言のふりたてまつりた

まへるぞかし。御祭の日、四月下の子・十一月下の申の日とを定めて、「わが御族に帝・後の宮

たちだまふものならば、公祭になさむ」と誓ひたてまつりたまへれば一条院の御時より、公祭

にはなりたるなり。」とあるように、吉田社は山蔭一族の鎮守社として創建されるが、山蔭孫

(中正の女)時姫と兼家の間に生まれた詮子に一条天皇が誕生して以降、公的祭祀も行われ、

正暦二年(九九一)には、十九奉幣社の一つとなった。常称寺現御住職の姓は山蔭姓であるが、

この姓は明治以降に改姓したものであり、それ以前は吉田姓であったという。

(72) 大きな事業の基礎。

(73) 本官の他に他の官を兼ねること。特に大弁や検非違使別当等の要職を兼ねること。

(74) 藤原高房、山蔭(高房子)、山蔭の子(説話・縁起では「七男七女」を指すか。

(75) 八講会。法華經八卷を八座にわけ、一卷ずつ講讀する法会。

(76) 仏事で朝夕鼓鐘をうって時報報すること(戒言)。

(77) 総持寺は、現在西国三十三ヶ所第二十二番札所。『寺門高僧記』(四 行尊伝)には、「九番、総

持寺、白檀三尺千手並同十一面觀音、願王山影中納言」とあり、『拾芥抄』(下・三十三所觀

音)等にも類似した記録が確認できる。『三國伝記』『直談因縁集』は類似した文言で結んでい

る。

(78) 月日、光陰。

(79) 寺記は「記中城村常称寺来由」として、常称寺が通雅の棲隱の地であったと記す。山蔭子孫

(四世孫)正雅が、一条天皇の勅を賜り、総持寺別当に補せられて以降、通雅に至るまで別当

職は相承されたところ。しかし、通雅は文明年間に、本願寺蓮如上人を師事し剃髪する。西玄

と名乗った。そのため、それ以後、別当職を寺僧に任せ、通雅は自ら一字を建てた。それが今

の常称寺であると伝えられている。

【付記】本稿をなすにあたり、筑波市補陀洛山常称寺前現住職の山蔭昭朗・昭裕両師に貴重な史料関

覧、翻刻及び掲載の御許可を賜った。また、同市補陀洛山総持寺住職中西隆英師にも御教示

を賜った。心より御礼申し上げる。また、本稿掲載写真は、紙幅の都合により、適宜裁断し

参考までに付したものである。

(研究紀要編集委員会は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、

本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、二〇〇五年十月十四日付)。